

第七十三回 日蓮宗教学研究発表大会

日蓮聖人御降誕八〇〇年記念講演（令和三年十一月十三日）

日蓮聖人御生誕をめぐる古文書

中尾 堯

はじめに

日蓮聖人の御生誕八百年にあたり、その「誕生」をどう意味づけるかについて、さまざまに論じられてきた。日蓮宗勸学院においても、三回にわたって「日蓮聖人御降誕八〇〇年の意義を考える―日蓮宗の現代的意義―」と題してパネルディスカッションが行われ、この問題の重要さがあらためて認識された。

研修会で交わされた議論の中で、日蓮聖人の誕生を特に「御降誕」として意義付け、その聖日とされる貞応元年二月十六日をめぐる意味を、各方面から問いかけられたことは重要である。特に、「日蓮聖人がみずから上行菩薩の自覚」を持たれたことから、日蓮聖人の誕生を「御降誕」と意味づけ、さらに二月十六日こそがその日とするのは、きわめて宗教的な営みであると価値的に捉えられた。さらに、「御降誕」の奇瑞として語られる湧水・蓮華・群鯛は、単なる奇瑞としてではなく、日蓮聖人の体験的な法華経信仰の表れであると、大きく捉えたことは注目される。

このように考えると、聖なる「二月十六日」の信仰上の意義付けは、それこそ日蓮聖人を仰ぐ祖師信仰八〇〇年の歴史を背景

に、明確に捉えなくてはならない。今度の勸学院の研修会で、この問いに対する問題意識として、おおよそ次の四項目をあげて、それぞれ専門領域の研究者からの提言を得た。その詳細な内容は、『日蓮宗勸学院報』第二十一・二十二・二十三号所収の、共通テーマによるシンポジウム「日蓮聖人御降誕八〇〇年の意義を考える―日蓮宗の現代的意義―」（平成二十九年・令和一・二年の勸学院研修会の報告）に掲載されている。

一、誕生の地

(1) 誕生の史実をめぐる当時の社会状況を、誕生の日・誕生の地・父母など出自などについて、いわば史的環境を明らかにすることである。(2) 「御降誕」と意義づける宗教的な理解の仕方、特に日蓮宗の教学体系を基とした理解がもとめられる。(3) 「御降誕」された日蓮聖人が、八〇〇年の時空を越えて再生する、祖師伝と祖師信仰の生成を辿ることである。これらの明らかにされた伝統の上に、勸学院で掲げた「日蓮宗の現代的意義」が、改めて問われるにちがいない。ここでは、この重要な問題に答えを提示するものではなく、大方の要請によってその基本的な文献なり古文書を提示するものである。

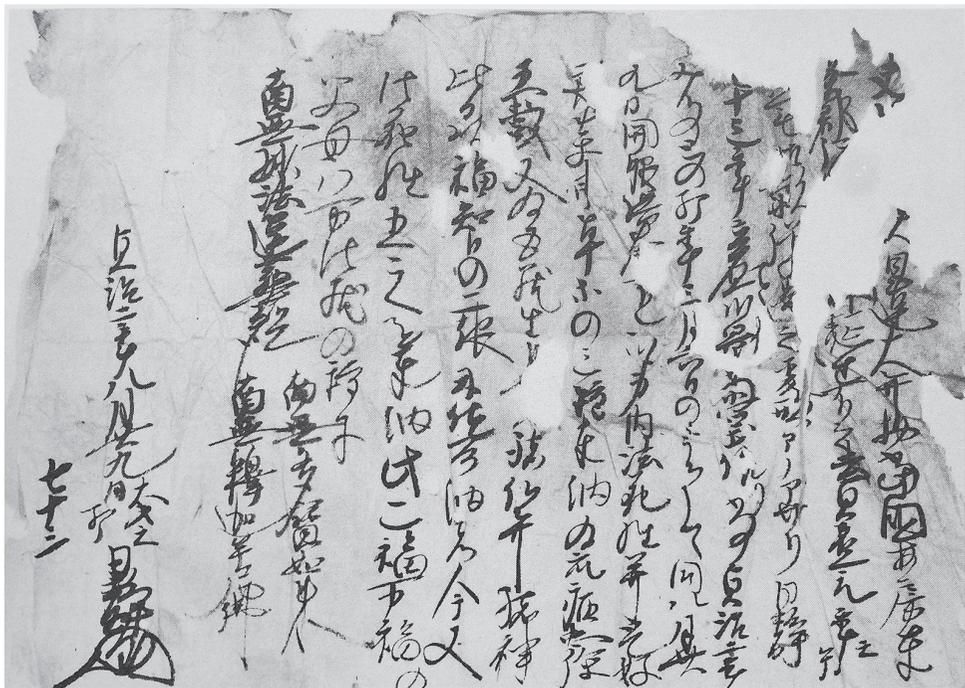
研修会では、「日蓮聖人御降誕の伝記と伝説」のテーマで、寺尾英智氏の問題提起があつて、すでに整理して提示されている。日蓮聖人の出自については、これまででもよく引かれるように、「佐渡御勘気鈔」「本尊問答鈔」「善無畏三蔵鈔」等の記事によって、漁夫の子としての出自が一般に伝えられてきた。しかし、鎌倉中期の漁村にみる村落の構成から見ると、漁夫が自由に出家することは困難で、有力な漁民の子であるとみるのが定説である。その上、これら三書はいずれも本書がたわつていないので、史料の価値が疑問視されている。しかしながら、本書が伝来しない遺文にも正筆とみてよいものもあるので、この三書についてもさらに十分な検討が必要であろうし、その余地はあるはずである。

むしろこれらの三史料で注目されるのは、その在所が「安房国長狭郡東条郷片海」であつたことであり、それは「新尼御前御

返事」に日蓮聖人のはるかな故郷の思い出として、かたうみ(片海)・いちかわ(市河)・こみなと(小湊)の磯をはるかに懐かしむ文言が記されていることである。現在の小湊の北につらなる地が市川であると、誕生寺に伝わる「誕生寺絵図」は示し、南方にあたる海岸が片海とみられる。

日蓮聖人の誕生がこの地であったことは確実で、日蓮聖人の山を背にした海岸の漁村での誕生は一応肯定できる。

この見解について有力な手掛かりとなったのは、平成三年五月に寺尾氏と実施した、誕生寺祖師堂に安置する「日蓮聖人木像」の胎内文書である。大量に納入された願文や写経の中から、この木像を造立するにあたって込めた、貞和二年(一三四六)八月二十九日付の「日静願文」一通である。この文書の写真と釈文は、日蓮聖人門下諸寺文書集成『誕生寺文書』(誕生寺文書編纂会(中尾堯・寺尾英智・緒方啓介)編 平成四年五月六日『誕生寺文書』に紹介されている)。



『日静上人願文』(小湊誕生寺蔵)

(釈文)「日静上人願文」貞治二年八月廿九日付(二四・六×三五・〇センチ)

夫、□□□日蓮大菩薩、於当国安房東

条郡片□□□誕生有_レ之、去貞応元年(壬午)、

□□□御影像造_レ之。爰刑部ノアサリ日静、

□十三季立願御影堂造り、尚貞治二年

みつのと卯年三月六日のミうちして、同八年廿

九日開眼供養有_レ之。御身内法花経并是好

良薬甘草等の三種奉_レ納、為_二衆病悉除_一、

五穀又五穀生身□、諸仏菩薩諸神

皆以_二福智の二報_一恩徳_一所_レ納者、今又

法花経五こくを奉_レ納、此_二福万福の

父母、八万法蔵の種子

南無多宝如来

南無妙法蓮華経

南無釈迦牟尼仏

貞治二年八月廿九日(太才之卯) 日 静(花押)

七十三

この文書を詳細にみると、次のように読み説かれる。

①日蓮聖人の誕生と木像造立

夫、□□日蓮大菩薩、当国安房東条郡片□^地において御誕生これ有り、去ぬる貞応元年（壬子）□、□□御影像これを造る、

貞治二年（一二六三）には、すでに「日蓮大菩薩」と「菩薩号」を用いていた。

日蓮聖人は、貞応元年（壬午）に当国安房東条郡片海において誕生された。誕生寺第三代（日蓮聖人を開山にすると第四代）日静が、日蓮聖人の御影像を誕生の地に造立する。

②立願と造像

爰に、刑部阿闍梨日静□十三季に立願して御影堂を造り、尚、貞治二年みつのとこの卯年三月六日鑿打ちして、同八月廿九日に開眼供養これ有り、

刑部^{ぎょうぶ}の阿闍梨^{あじやりにちじょう}日静の七十三歳の時に立願して、まず日蓮聖人の御影堂^{みえいどう}を建立した。

御影堂に安置する日蓮聖人の御影は、貞治二年三月六日に鑿^{のみ}入れをして、その八月二十九日に開眼供養して御影堂に奉安した。

③胎内納入物と願意

御身の内に法花経、并びに是好良葉の甘草等の三種を納め奉るは衆病悉除の為、五穀は又五蔵生身□の為、諸仏・菩薩・諸神には、福智の二をもつて恩徳に報いと納むる者なり、今、又□□法花経・五穀を納め奉る、此の二福は万福の父母、八万法蔵の種子なり、

胎内に奉籠した聖物とその願意は、法華経の写経をはじめ甘草等の葉草三種は、衆生の病を悉く除くことを、五穀は五蔵生身を祈る為である。諸仏・菩薩・諸神には皆福智の二をもつて、その恩徳に報いと願って納める。さらに法華経の写経と五穀を納める趣旨は、この二福は万福の父母であり、五穀は八幡法蔵の種子にあたからである。

④書き止め・日付・署名等

「南無妙法蓮華経」の題目と、釈迦・多宝の両尊を勧請する。ついで「貞治二年八月廿五日〔大才之卯〕」の日付と、「七十
三 日静（花押）」の署名と花押を据えて、「日静」の願文は終わる。

これらの注目すべき諸点を掲げると、次の通りである。

日蓮聖人の誕生が安房国長狭郡東条郷片海（現在の千葉県鴨川市小湊の付近）であることは、誕生寺第四世の日静が長年にわたって木像を祖師堂に安置しようと念願を懐いた末、日蓮聖人の没後六十五年目にあたる七十三歳の時に、ようやく所期の通り実現できたことよってわかる。造立の願主日静は日蓮聖人に直接面拝して受法した「面授」の弟子ではないが、幼い時から「片海に誕生」という事実をよく承知していた筈であるから、「貞応元年」という誕生の年とともに鮮明な記憶にあったことは間違いない。したがって、「貞応元年に片海に出生」という史実は確実といわなくてはならない。

ただ惜しいことには、「貞応二年」の年紀に続く文字は欠字となっていて、擦り切れている文字の間隔から見ると「二月十六日」の日付があつたようにはみられない。木像造立の願主で誕生寺住持の日静には、日蓮聖人の誕生日にあたる「二月十六日」はまだ念頭にはなく、「貞応元年」の生年の他は記憶になかったのであろう。ちなみに旧暦の貞応元年二月十六日は、グレゴリウス暦によつて今日の太陽暦になおすと気候の良くなる三月三十日で、釈尊入滅の翌日にあたることから、これから間もなくこの吉日が選ばれたのではなからうか。前近代にあつては、いかに歴史上に名を残した人物であっても、生まれた月日まで明確なケースは全くと言つてよい程みられない。偉大な救世主として仰ぐ日蓮聖人の誕生を寿ぐために、この日が定められたという、きわめて宗教的な意味を帯びる聖なる日である。

後に身延山に隠棲した日蓮聖人にとって、はるか東にあたる故郷の風光は、懐かしい思い出いっぱいであつた。その故郷から新尼御前が届けてくれた「あまのり」をみて、日蓮聖人は深い望郷の念にかられ、一通の返事をしたためた。「新尼御前御返事」（身延山曾存）がそれである。

「新尼御前御返事」(文永十二)二月十六日付 昭和定本『日蓮聖人遺文』所収

あまのり一ふくろ送給了。又大尼御前よりあまのり畏こまり入て候、(中略)

峰に上てわかめやをいたると見候へば、さにてはなくしてわらびのみ並立たり。谷に下てあまのりやをいたると尋れば、あまのりやまりてやみるらん、せりのみしげりふしたり。古郷の事はるかに思わすれて候つるに、今此のあまのりを見候て、よしなき心をもひいでて、うくつらし。かたうみ・いちかわ・こみなとの磯のほとりにて昔見しあまのりなり。色形あぢわひもかはらず。など我父母かはらせ給けん、かたちがへなるうらめしき、なみだをさへがたし。(中略)

(文永十二)二月十六日

日蓮(花押)

新尼御前御返事

「新尼御前御返事」は、故郷の海辺を懐しむ、日蓮聖人の飾らない自然な想いが溢れた書として、深い意味がある。「今此のあまのりを見候て、よしなき心をもひいでて、うくつらし」と、海辺に生える海藻に故郷の海の香を想い、「かたうみ(片海)・いちかわ(市河)・こみなと(小湊)の磯のほとり」と、内海を囲む海浜の村々の景観を懐かしむ。身延の山中に過ぐす日蓮聖人にとって、故郷の思いに浸る安らかなひと時であったに違いない。このような内海を囲む風光は、今まで述べた東条郷の片海のそのままに、日蓮聖人の脳裏に焼き付いていた。

日蓮聖人の生家の所在について、京都本圀寺『日蓮聖人註画讃』の「第一 誕生」の段に、蓮華と湧水の二奇瑞とともに、庭先がもうすぐ海辺のように描かれているが、実際には塩害などが激しくて居住環境としてまことに不適切である。また、身延山久遠寺に伝わる日朝の『元祖化導記』には「今彼処(小湊)誕生寺小堂有_{トテ}之」とあり、小湊あたりの微高地に小堂があったと記していることから、これが生家の場所にあたるというわけにはいかないが、日静が建てて日蓮聖人像を安置した小堂とみることが許されると思う。先に紹介した勸学院の第一回研修会で、寺尾氏が「元禄十六年の大地震・津波によって……誕生寺の伽藍も流出したわけではない」と述べている。この説には賛成で、誕生寺の寺域は元より現在地であり、小湊と片海の間にある小

高い微高地で、津波や塩害の及ばない場所と見るのが妥当であろう。

この事情を物語る一例として、先述の「誕生寺日蓮聖人木像胎内納入文書」が納入されている、「日蓮聖人木像」についてみよう。等身大のこの木像は、全体的にどっしりと重量感のある、寄木造りで玉眼を嵌入し彩色を施した、裸形着衣形式の等身の坐像である。特色は、白毫をあらわす玉を埋める穴が、眉間に施されていることであるが、今は欠失したままである。この木像の解体修理にあたって、像容の大幅な変更が施されていることが分かった。削除された跡を復元的に元の姿を観察すると、相貌は実に豊かで重量感にあふれ、小湊の海浜に住む有力な漁民を観るようで、津波などの大災害に遭遇するととても運び出すことは困難であろう。この木像は帷子（白衣）に衣帯を着け袈裟を掛けた上で、一間堂か三間堂に安置されていたものとみられる。現在の大伽藍は、その後地に建立されたものである。ちなみに、中山法華経寺の祖師堂は同じ場所に建て替えられ、重文に指定されている現在の堂は五度目の再建で、延宝六年（一六七八）に完成している。

二、誕生の社会環境

日蓮聖人の生誕をめぐって語られる事項の一つに、父が貫名重忠で母が梅菊御前と伝えられ、先祖は遠江国にあるということである。すでに十五世紀には詞書が成立していた『日蓮聖人註画讃』には、「蓮師姓三国氏、父は遠州刺史貫名重連之次子重忠也、師は其の第四子なり、其の先は聖武皇帝の裔なり、父は遠州より安房州長狭郡東条郷片海市河村小湊浦に竄たれ漁叟と成る」と述べている。しかし、このことは日蓮聖人伝よりほかに史料としては確認できないし、なかでも「貫名」の姓については史実としては必ずしも承認されていない現状である。しかしながら、昭和三十七年に中山法華経寺の聖教殿から発見された「日蓮聖人要文紙背文書」のうちに、『破禅宗』紙背文書のなかから宝治二年（一二四八）六月六日付の「法橋長専・ぬきなの御局連署陳状案」に、長専と並んで「貫名の御局」が見え注目される。

「破禅宗」紙背文書」は、『秘書要文』『双紙要文』『天台肝要文』の各紙背文書とともに、中山法華経寺聖教殿の聖教の中から発見し、中尾堯編『中山法華経寺史料』において発表した一二〇点あまりの文書群である。これらの文書群は、下総国の守護をつとめる千葉介頼胤の家臣である富木常忍のもとに集積されたもので、守護所での事務を遂行する過程で機能を果たし終えた書類である。すでに用済みとなった文書を文庫から取り出し、裏返しに二つ折りにしたものを重ね綴じに仕立ててノートを作成し、聖教を書写する帖として日蓮聖人に呈上したものである。この文書群の上限は建長五年（一二五三）、下限は文永二年（一二六五）で、とに日蓮聖人が二九歳から四四歳の間で、比叡山遊学の後期から立教開宗を経て、鎌倉での活躍期にあたる。また、この要文集のうち『天台肝要文』の紙背には、日蓮聖人の折紙の書状が一通ほど混入している。これらの要文紙背文書のうち、「法橋長専・ぬきなの御局連署陳状案」の年紀の「宝治二年」は、日蓮聖人の比叡山に在山した二七歳の時にあたる。次にその全文を紹介しよう。

「法橋長専・ぬきなの御局連署陳状案」 宝治二年六月二日付

（首欠）る、このうゑハ子細にをよハさるか、又松に、たる草ハ松よりもめつらしく、りんたうにたかハぬはなハリんとうよりもなつかし、これらは一旦のけいき也、再往の難におよハす、つきに田につほをもちゐることハ諸国一同也、田につほなくハ田舎の沙汰、なに、よりにかりをしるへき、明仏か御恩の多少なるをもてかしろしへきや、ひとへに無道の訴訟にほこるかゆへに、身のなけきをかへりミす、不足言の申状也、尤不便のしたひ也、まことに御□迹あるへきか、

以前条々大概如斯、抑たいふ明仏、山水をこのむ心あさく、前截をす□思すくなきかゆへに、池のたまも、あとなく、た、あらませの庭の松風ときこゆ、今ハふ

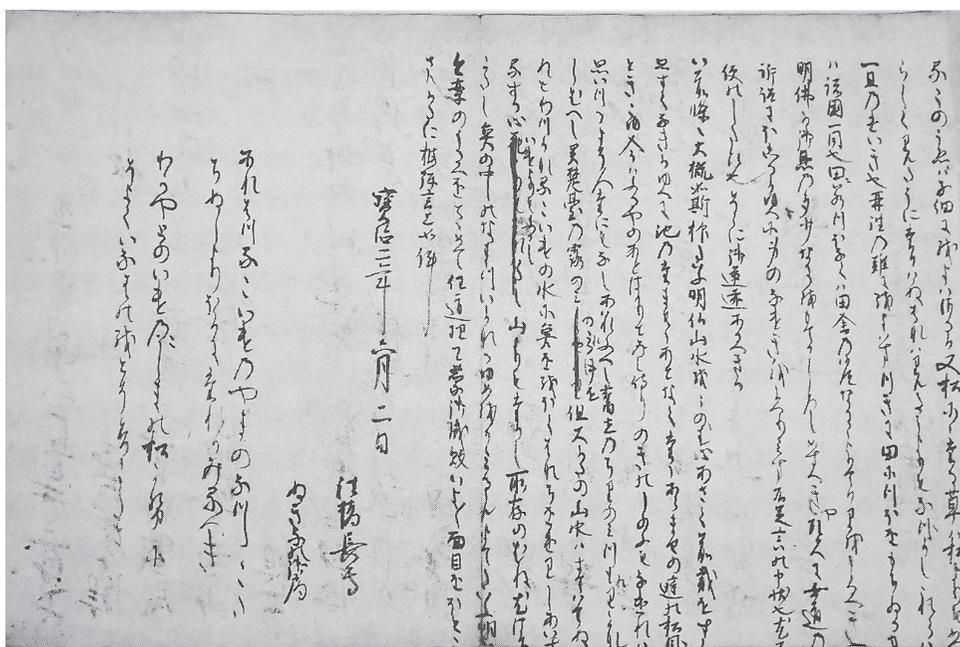
るやのあとばかりとみえ侍り、のきのしのふもなけれハ、思いつるよそ人たにもなし、あハれむへし、旧世のちりのミつもれり、かなしむへし、呉楚台の露のミのこれる事を、但大かたの山水ハすてハてぬれハ、わつかなるこいけの水に魚をくはなちをけりしあい□るか心いけよりふかし、山よりもたかし、所存のむね尤は□かたし、魚の中のなまついかなるゆめをミるにて、たいふ明□^(也)、今案のうたへをとめて、任道理て蒙御成敗、いよいよ面目をほとこさんかたに、披陳言上如件

宝治二年六月二日

法橋長專

ぬきな御局

あれはつるこいけのやまのなつこたち ぬしよりほかにたれかみるへき
わかやとのいけのこしまの松かせに そよくいなはのおとそすすしき



「法橋長専・ぬきなの御局連署陳状案」宝治二年六月二日付

この文書の内容は、前欠のために具体的な事情はわからないが、大夫明仏が所領について無道の訴訟を起こすので、これを止めるよう道理にしたがつて裁断していただきたいと、下総国守護の千葉介頼胤に要請している。また、大夫明仏は風流をも解しないといい、小池の中のナマズのように大きな存在であったかもしれない。次いで年紀を記した上で、「法橋長専・ぬきなの御局」の署名をし、最後に二首の和歌をあげている。

あれはつるこいけのやまのなつこたち

ぬしよりほかにたれかみるへき

わかやとのいけのこしまの松かせに

そよくいなおとそす、しき

第一首は、荒れ果ててしまった庭の姿を、手入れて面倒をみるのは「主」より外は誰も居ないと訴える。その「主」とは誰であろうか。第二首は、わが館の小池に浮かぶ小島の松に、田圃の稲葉をこえて吹き来る風の音が、涼しく聞こえる快い景を詠んでいる。ここで注目されるのは、「稲葉」の音が「因幡」に通じることである。下総国の守護千葉介頼胤の家臣として、訴訟の処理にも当たっていた富木常忍は、父の蓮忍の代に因幡国（鳥取県）一宮から下総国に移住していたことが、「双紙要文

「紙背文書」のうち「沙弥常忍訴状」に「蓮忍令居于関東（蓮忍関東に居住せしむ）」とあって明確である。したがって、和歌の「いなはのおとそすすしき」は「稲葉^ニ因幡の音を涼しき」で、守護の千葉介頼胤の判断を受けた、富木常忍から色よい返事を期待するという意味である。

次に、「ぬきな^ノ御局」に連署した長専については、この紙背文書群に一三点もの自筆文書を伝えているので、その立場は明確である。結論的に言えば、富木常忍と同様に千葉介頼胤の家臣として下総国の政務にたずさわり、常には鎌倉幕府に向向して、幕府と下総国守護の連絡にあたる、いわば文筆官僚の役割を担っていた。長専と富木常忍とは、鎌倉と下総国守護所にあつて、互いに緊密な連絡をとり続けていたのである。

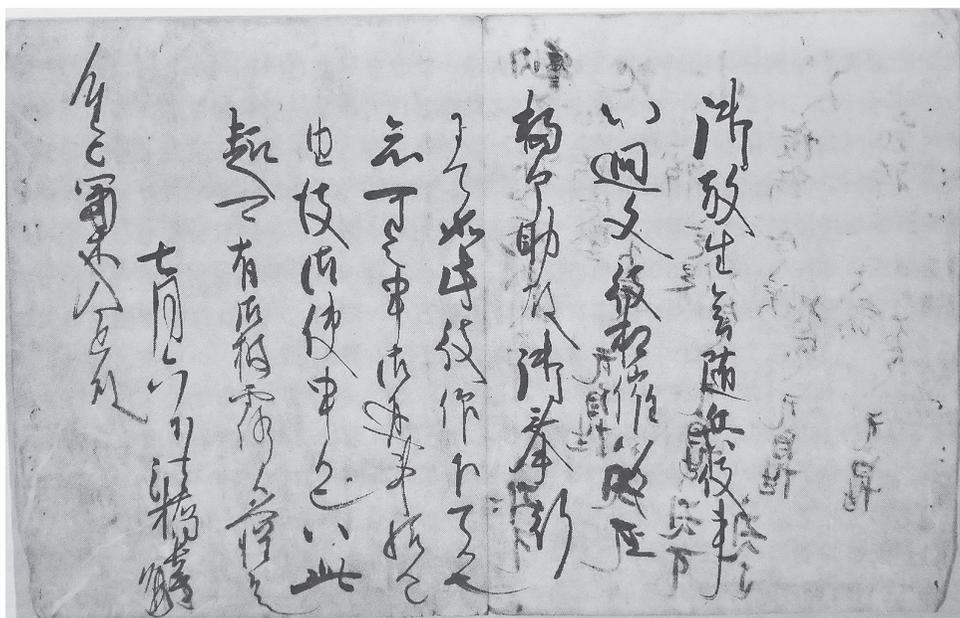
「法橋長専書状」（年次未詳）七月六日付 「秘書」紙背文書

御放生会随兵役之事^一以^二廻文^一被^二相催^一候^一掃部助殿御奉行^一にて、如^レ此被^二仰下^一て候也、^一念可^下令^レ申^二御返事^一給^上候之^一由、被^二御使申^一候也、以^二此^一趣^二可^レ有^二御披露^一候、恐惶謹言

七月六日

法橋長専（花押）

進上 富木入道殿



「法橋長專書状」 七月六日付（中山法華經寺藏）

「ぬきな御局」は「貫名の局」で、下総国の行政組織でみると、守護の千葉頼胤に仕える女官にあたる。先に挙げた「法橋長専・ぬきな御局連署陳状案」は、守護所に設けられている富木常忍の執務室に保存されていたはずで、その筆跡は長専のものとは全く異なっていて、ぬきな御つぼねみずから添削した痕跡がある。その上、訴状の旨を詠みこんだ和歌を披露するなど、文学的才能を具えた知的な女性である。したがって、この陳状案は、大夫明仏の訴状に対する陳状として、貫名の御局が守護所の執務室で起草し、後程清書した上で長専とともに連署加判して提出した。

このようにみてくると、下総の守護千葉頼胤のもとに、法橋長専・貫名局・因幡国出身の富木常忍、さらには越中国出身の太田乗明らの家臣がいて、主君から相応の所領を宛てがわれ、主に文筆をもって守護の職務を援けていたものとみられる。この「貫名の御局」の存在が直接に日蓮聖人の父貫名重連につながると短絡的にみるわけではないが、鎌倉時代には希であった文筆の家との関りは注目すべきであろう。日蓮聖人は、幼少の時から「領家の尼」に恩顧を蒙り、若くして清澄寺の飼鹿を狩る東条を追い、中国の故事に感動的な知識を帯びて政治情況に正確な理解を示し、「文つかい」の家と環境に生まれ育ったことを雄弁に物語っている。

る。

なお、「ぬきななの御局」については、中尾堯「日蓮聖人と「ぬきななの御局」」（庵谷先生古稀記念論文集『日蓮教学とその展開』所収）を参照されたい。「領家の尼」については、『昭和定本日蓮聖人遺文』所収「清澄大衆中」建治二年正月十二日付（原本は中山法華経寺蔵）に、次のような記事がある。

領家の尼ごぜんは女人なり、愚痴なれば人々のいひをどせばさこそとましまし候らめ。されども恩をしらぬ人となりて、後生に悪道に墮させ給はん事こそ、不便に候へども、又一には日蓮が父母等に恩をかほらせたる人なれば、いかにしても後生をたすけたてまつらんとこそいひ候へ。（中略）

（建治二年）正月十一日

日蓮（花押）

安房国清澄寺大衆中

三、日蓮聖人生誕の聖化

宗教的偉人の誕生をことほぐために、出生の意義をさまざまに荘厳し誕生伝説として伝ええられることは、洋の東西を問わず広くみられるところである。その誕生その事実については、降誕・再誕・降臨・化生・垂迹など、長編にわたる神話に基づく観念にしたがって、豊かに語彙が用意されている。

日本の神話についてみると、天上に位置する高天原の神々の世界から、地上の人間世界に神そのままの姿で「降臨」する、垂直の動線がみられる。輪廻の思想を根幹とする仏教にあつては、浄土の仏が姿を変えて人界に現れる降誕・化生・化身、六道を輪廻する再誕・転生などの語が用いられる。実際、『立正安国論』では、前述したように法然が勢至菩薩や善導大師の再誕として、広く敬われたことを次のように述べている。

○一夢の靈応を蒙り（専修念仏を）四裔の親疎に弘む。故に或いは勢至の化身と号し、或いは善導の再誕と仰ぐ。然れば則ち十方の貴賤は頭を低れ、一朝の男女は歩みを運ぶ。

○（その姿は）或いは彼の遺体を忍んで木画の像に露わし、或いは其の妄説を信じて莠言の模を彫り、これを海内に模めこれを海外にもてあそぶ。

浄土教の僧や信者は、阿弥陀仏の脇侍たる勢至菩薩、中国の浄土教を大成し弘めた善導大師の、末法の世に再誕した聖者として法然を深く仰ぎ敬った。その具体的な事例は、在りし日の法然の姿を絵像や木像に表わし、その著書の『選択集』を木版に起こして国の内外に弘めたりした。

この例でも分かるように、「誕生」についての意義付けは、その人物の没後に於ける評価に関わるもので、存生の時にみずから試みることではない。したがって日蓮聖人は、みずからを「上行菩薩の再誕」と公言することはなく、あくまで「日蓮八十万億那由他諸菩薩の代官としてこれを申す」（寺泊御書）と自己規定している。日蓮聖人の誕生をもって上行菩薩の再誕・降誕と仰ぐのは、没後における祖師信仰の営みであり、宗祖として尊崇する信仰の源泉としての意味を帯びるものである。

この意味で、勸学院のシンポジウムにおいて、関戸堯海師が論じたように、末法の世に法華経を弘めるべく現れた上行菩薩を、まさに日蓮聖人になぞらえることは、日蓮聖人を敬仰する者の宗教的な心情に他ならないのである。日蓮聖人の生誕を仏界からの「御降誕」と称し、その日を上行菩薩の「御降誕の日」と観念することは、このような心情に基づく信仰の営みとして意味づけられる。

日蓮聖人の事績ないし誕生を聖話化する傾向は、すでに在世中からあらわれ、入滅の後には急速に広まってゆく。日蓮聖人の七回忌には池上本門寺の「日蓮聖人木像」が造立されたのをはじめ、「日蓮聖人画像」が描かれて、読経像と説法像という像容が早くから定まった。

日蓮聖人の弟子をはじめその後継者たちは、師の足跡をたどって往時を観念的に再体験する、霊場巡拝の風が広まり、相模国

の片瀬龍口をはじめとする法難の故地、それに誕生と入滅の地、墓塔が定まりのコースとして選ばれる。これらの論点については、中尾堯『日蓮信仰の系譜と儀礼』・望月真澄『近世日蓮宗の祖師信仰と守護神信仰』『身延山信仰の形成と伝播』『身延山参詣路をあるく』等を参照されたい。

このような日蓮聖人を祖師と仰ぐ祖師信仰において特色とされるのは、他の祖師にはみられないほど大量の真蹟遺文が伝来し、その蒐集保存が情熱的に図られたことである。しかも、日蓮聖人の伝記を編纂し叙述するにあたって、その依って立つべき論拠が真蹟によって確認できることである。このような長所をフルにいかして、日蓮聖人伝を体系的にまとめたのが日朝の『元祖化導記』と日澄の『日蓮聖人註画讃』で、いずれも室町時代十五・六世紀の交に成立した。この両書は、日蓮聖人遺文の体系と、遺跡の巡歴をもととした伝記の構築がなされていることで、他の祖師伝に突出した特色である。

この二書のなかで、『日蓮聖人註画讃』全五巻は、日蓮聖人の生涯をさまざまな奇瑞譚と縁起によって見事に荘厳し、祖師信仰の祖型をなしている。第一巻の「第一 誕生」では、日蓮聖人の生誕を次のように叙述している。

蓮氏姓三国氏、父遠州刺史貫名重実之次子重忠也、師其第四子也、其先聖武皇帝之裔、父自遠江州一竄安房州長狭郡東条郷片海市河村小湊浦、成魚叟、母清氏、恒仰朝曦一念誦、夢日光映胸娠、本朝八十六代帝後堀川院一諱秀仁御宇、貞応元年一壬午二月十六日午刻誕焉、如来滅後当二千一百七十一年、面貌嚴毅、容儀挺特、如来二月十五日示滅、元祖十六日現生、死生次恐有レ以、

蓮氏の姓は三国氏、父は遠州の刺史貫名重実の次子重忠也、師は其の第四子也、其の先は聖武皇帝の裔、父は遠江州より安房州長狭郡東条郷片海市河村小湊浦に竄され、魚叟となれり、母は清氏、恒に朝曦を仰ぎ念誦せり、日光の胸に映るを夢みて娠めり、本朝八十六代帝後堀川院一諱秀仁御宇、貞応元年一壬午二月十六日午の刻に誕れたまえり、如来滅後二千一百七十一年一に当たると、面貌は嚴毅にして、容儀は挺特なり、如来は二月十五日に滅を示したまえり、元祖は十六日に生を現じたまえり、死生の次は恐くは以有るなり、

この詞書ついでみると、おおよそ次のような内容が示されている。

- ① まず、「蓮氏の姓は三国氏なり、父は遠州刺史貫名重実の次子重忠也、師はその第四子なり、その先は聖武天皇の裔なり」と、日蓮聖人の父の系譜が、聖武天皇の後裔にあたる遠江国の国司にあるという、「貴種」の出であるとする。
- ② 父が辺境の安房国に在った所以を「父は遠江州より安房州長狭郡東条郷片海市河村小湊浦に竄れて漁叟となる」として、貴い家柄の人がその在所を離れ、他郷で立派に暮らすという、「貴種流離譚」が成り立つ。
- ③ その母については「母は清氏なり、恒に朝曦を仰ぎ念誦せり、日光の胸に映ずるを夢みて娠めり」と、母が清原氏の姓であり、日蓮聖人を孕むに至った日々の信仰をいう。
- ④ 生誕の日を、「本朝八十六代帝後堀川院諱秀仁御宇、貞応元年壬午二月十六日午刻誕れたまう」と叙述する。日蓮聖人生誕二〇〇年後の頃には、すでに二月十六日午の刻と、誕生の時刻まで伝えられていた。
- ⑤ 生誕の年を、「(釈迦) 如来滅後二千一百七十或一年に当たれり」と、仏教史上に意義付ける。
- ⑥ 生誕の日を、「面貌は嚴毅にして、容儀は提特なり、如来は二月十五日滅を示し、元祖は十六日に生を現じたまう、死生の次にあるか」と、誕生日を釈尊入滅の翌日なることの意味を、「順次生」の表れと説く。
- ⑦ 「この汀に小水有り、早湧にも乾溢ならず、是れ産育の浴場也」と、現在も語られている「三奇瑞」のうち「誕生水」が語られている。しかし、「青蓮華」と「鯛の浦」には触れていないので、「三奇瑞」が整うのは、もっと後のことであろう。この「三奇瑞」については、勸学院研修会における岡田真水氏の発言が注目される。

超越的な宗教的偉人であり、一宗の祖師である日蓮聖人の伝記をめぐり、時代を越えて様々な莊嚴が加えられ、神秘的な装いをまとった日蓮聖人像が描き上げられる。きわめて合理的志向のつよい日蓮聖人の事績の認識においても、このようにして構成された日蓮聖人伝が、堅い基盤となっていることは疑うことはできない。むしろ、長い歴史の過程で神話を遂げた伝記の物語の中に、信仰を受けとめる側の心情を窺うとともに、新たな教理上の意味付けを試みなくてはならないだろう。

四、結論

はじめに挙げた三項目について、新出の古文書・文献を紹介しながら、一応の見通しを立てた。まず、日蓮聖人を、日本史上の歴史的存在として捉えた場合、誕生地の片海を確認するとともに、文筆をもって主君に仕える家臣¹¹被官、または莊園の現地における実務者たる莊官などの環境に、出自を求めることが出来る。日蓮聖人の一生にわたる文筆活動が、宗教上は勿論のこと、社会的にも高い精度を誇ることは言うまでもなく、逆説的に文筆の家というその出自が想定できる。

あとの二つの問題は、あわせて日蓮聖人の聖化として扱った。まず、聖人の生誕を有意義的に意味する「降誕」「再誕」「化身」などの用語が、仏教の輪廻の思想をもととして用いられることを指摘する。日蓮聖人の生誕が「上行菩薩の降誕」と意義付けられる所以は、『法華経』の教説によって確認できるが、それはあくまで日蓮聖人を讃仰する者の宗教的な営みによるもので、自称ではありえなかった。さらに、日蓮聖人伝の神話化は体験的に進んで、『日蓮聖人註画讚』にみる祖師としての伝記が生まれ、神秘的な装いをこらした日蓮聖人の伝記として、今日に息づいている。日蓮聖人の事績を、『法華経』の教説をもとに聖化する営みは、日蓮聖人自らによってすでに始められ、その後継者や信仰者によって急速に進められた。日蓮聖人の遺文に向かうとき、それは「宗教文書」であり「信仰の典籍」であることを、何よりも深く理解し前提とすべきこととは言うまでもないが、聖話の意義付けをしっかりと試みることが今後の大きな課題であるに違いない。